



TOHOKU SEIKATSU BUNKA UNIVERSITY

東北生活文化大学 美術学部 美術表現学科

# 高校生デッサンコンクール2023 オンライン展示

## 大賞



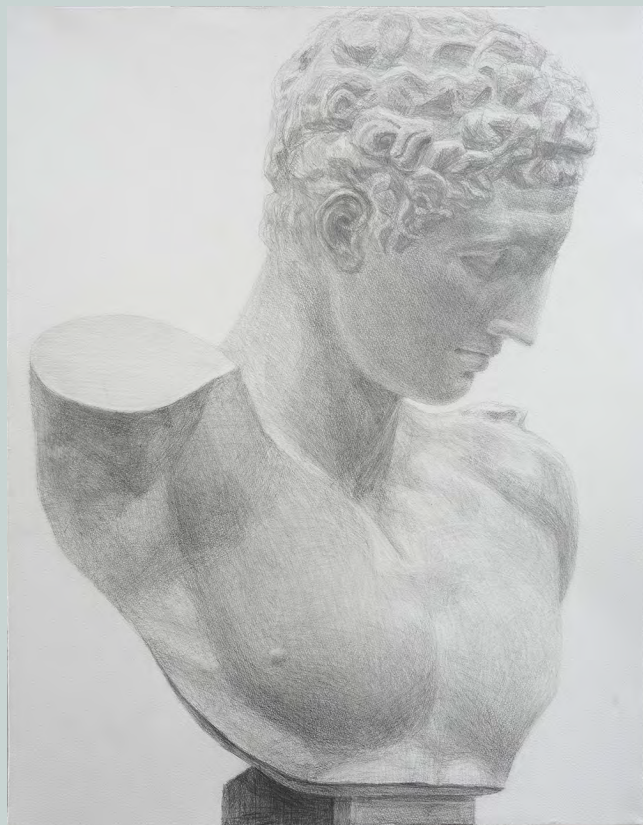
東北生活文化大学高等学校 1年

滝田 埜乃花

審査員長講評：佐藤 一郎

表面が滑面の画用紙に、ラオコーンが描かれています。鉛筆の硬軟を使い分け、さらにハイライトと思われる部分を消具で白抜きしています。トップライトで、陰影がつけにくく、苦勞しています。台座に、どのような向きでラオコーンが設置されているのかが、曖昧にもなっています。さらに、左右、上下の全体の調子の流れを掴みながら、身体部分が回りこむ際の形態を把握した描写が求められます。細かく入り組んだ顔、髪の詳細に、瀧田さんに特有の微細な「ものを見る力」が感じ取れます。凸面の明るさだけでなく、凹面の明るさにも注目してください。

# 準大賞



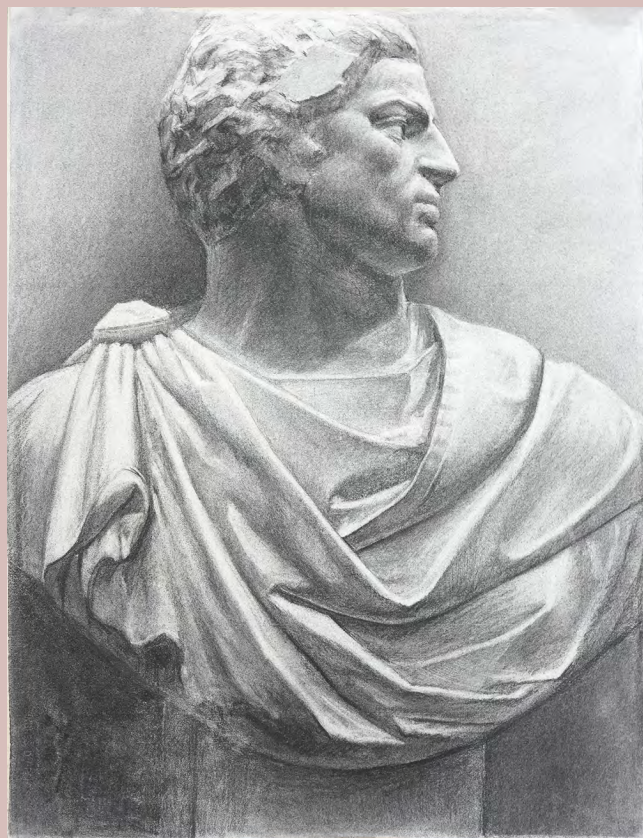
宮城県宮城野高等学校 2年

関口 弥咲

審査員講評：北折 整

繊細なタッチにより、全体に大変美しい調子で仕上がっています。石膏像の立体感や空間感などもそつなく表現できています。ただし、眉間の形や頬の明暗など、もう一步観察できると良かったでしょう。

# 優秀賞



宮城県宮城野高等学校 2年

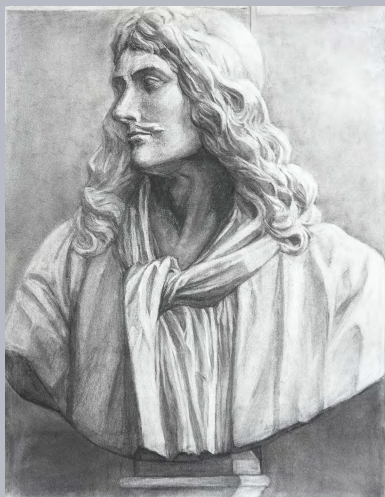
森 あおば

審査員講評：鈴木 専

グレーが美しく側頭部の平たい面が素敵！全体の丸さや大きさ、あなたの目から石膏像までの距離、背景との空間はもっと描いて欲しい。四辺の描き残しも惜しい！でもここまで描けているのだものどんどん進化しますよ！



# 佳作



宮城県宮城野高等学校 2年

佐々木 里緒

審査員講評：佐々木 成美

石膏と、とりまく空間（背景）の関係が提出された作品群の中で一番丁寧に描かれている。それは対象をよく観察し、色彩を相対的に注意深く視ているためである。この観点は絵を描く上でとても大切な事のように感じる。



宮城県宮城野高等学校 3年

平田 凛

審査員講評：北折 整

木炭による調子の幅が広く、石膏像が力強く描かれています。光を明快に捉えた明暗表現が、石膏像の存在感を感じさせます。ただし、像の胸部やその裏面の暗さ・明暗の諧調が少々単調になってしまいました。



東北生活文化大学高等学校 1年

三浦 快斗

審査員講評：鈴木 専

とても良く描かれています。特に首～喉を通して顎までの描画は説得力があります。その一方、顎から顔面～頭頂までや、右頭部と肩の位置関係が曖昧で惜しい！大きな動きを常に意識して描き進めると良いですよ！



東北生活文化大学高等学校 2年

田畑 優

審査員講評：森岡 淳

奴隷像の持つ量感と肩にかかった布の質感対比を捉えようと苦心している様が見え好感を持ちました。今後は描く際の目線の位置を気にして描くとより立体感が出るように感じますので、期待しています。



東北生活文化大学高等学校 3年

斎藤 亜弥

審査員講評：伊勢 周平

後頭部の異素材と髪部分の位置関係が多少わかりづらいですが、ものと陰影の形は正確で安心して見られました。見上げ構図で難しかったと思います。明部のトーン幅がもっとあれば、細部や空気感もより言えたと思います。

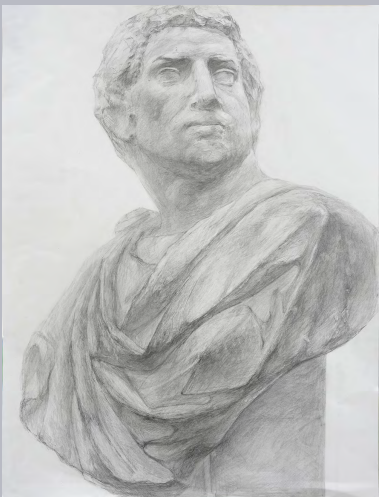


東北生活文化大学高等学校 3年

南城 志音

審査員講評：伊勢 周平

ザックリとした特徴的なストロークで、形や陰影を裏切らずにトルソの存在感にアプローチしたのが印象的でした。細部はもっと言えるはず！レンブラントやルーベンスのドローイングをおすすめしたくなりました。



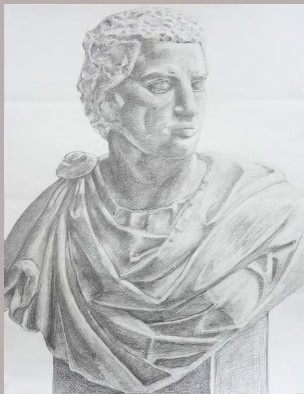
東北生活文化大学高等学校 3年

木村 心春

審査員講評：森岡 淳

鉛筆のグレーのトーンを上手に使いながら、ブルータスの持つたくましい体と強い眼差しが描けていると思います。今後はトーンの幅を増やし、奥行きが出せる様になると、さらに量感が出ると思います。

# 審査員特別賞



宮城県涌谷高等学校 1年

後藤 美和

審査員長講評：佐藤 一郎

表面が粗面で、粒面が見える厚手の画用紙に、ブルータスが描かれています。大まかな形態を捉えてから、ニードルの先か、硬筆の鉛筆によるハッチングによる彫り込むような陰影づけが行われており、その後比較的柔らかい鉛筆の腹で、調子がつけられています。その結果、硬質な線引きは、近寄ってみると、白く見えてしまいます。明部にも場所によって明るさの段階があるので、そのような滑らかに移動する繊細なグラデーションも必要になります。それなりに集中して描かれていますが、地道な「見ること」「描くこと」が往還する修練を続けてください。

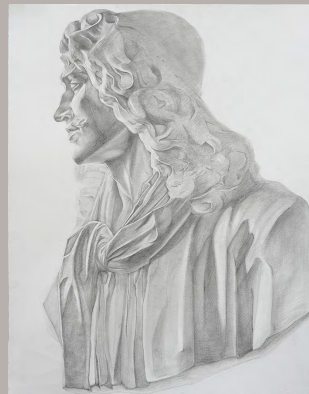


仙台大学附属明成高等学校 1年

レ マイ チュック

審査員講評：伊勢 周平

有機的に描写されたトルソを主題として、恣意的に画面に押し込められた剥製と枯れ枝、そして取っ掛けりを失った四つ角の影は、どこかユーモラスで強烈な印象を見る人に残します。絵にタブーなどなかったかのように。



宮城県宮城野高等学校 2年

管野 奏汰

審査員講評：鈴木 専

劇的な光、作者の熱量が伝わります。その一方で右髪や胴断面など、白く弱いままの所が惜しい！描画中も石膏像全体を眺めながら陰影を調整すると良です。構図もちよい確認ですね！とはいえこれからもっと描けますよ！



宮城県古川黎明高等学校 3年

小瀬木 紅映

審査員講評：佐々木 成美

暗いトーンの色数が豊富で、グラデーションを丁寧に作っている。それは何度も炭を重ねて定着させているためであり、慎重に調子を作っている。また石膏のみならず、まわりの空間も絵にする意欲が伝わり素晴らしい。



# 審査員長総評

今回の場合、応募出品総数は去年と比べると少ないですが、しかし、一点一点じっくり見てみると、それぞれ自分なりに、石膏デッサンに一生懸命打ち込んでいます。特に、入賞した作品のクオリティはそれなりに高いと思いました。

描画材料は、木炭の場合と鉛筆の場合に大きく分けられていました。その結果、木炭による黒と白のコントラストは、鉛筆のコントラストと比べるとはるかに強いので、見栄えが違います。特に、木炭で描かれる石膏像は、物質感なり、迫真性にいかに自分が近づけるのか。かたや、鉛筆では、比較すると、ニュアンスに富む調子の幅が生まれ、そういう意味では、いわゆる美しいデッサンになっています。

それと、1年生、2年生、3年生が応募していますね。26番は何年生ですか。一年生ですか。その一年生が大賞をとったのですか。なかなかの期待を抱かせます。頭部の描写には意気込みがとてこもっていて、ただものを写すというのではなく、鉛筆による絵画的美しさが出ています。あと、身体の方がもう少し時間をかけて追うことができれば、さらに良いデッサンになります。

いずれにせよ、石膏像は、ギリシア、ローマを経てルネッサンスの時代の彫刻像であり、人間の生きている有機的な動きを、彫刻家が丁寧にそのような動きを表現しようとしています。そのような動勢（ムーブメント）にいかに今の自分たちが近づけるのか、と挑戦しているわけです。知らず知らずのうちに、ルネッサンスの調和のとれた美意識、美しさに、結果として迫っていきます。そのような一大潮流は現代まで続いており、結果として、現在においても受験に石膏像が使われているのです。現実とはなにかと、自分の目で観察し、ひいては人間および地球、宇宙の謎を追い求め、科学技術、テクノロジーは展開してきました。絵画芸術も、デジタルコンテンツをも含めて、科学技術と同じように発展しているのではないのでしょうか。

そのような意味でも、今の若い人たちは石膏像にチャレンジして、なおかつ、大学に入ったらマルチメディアとしてのテクノロジーを駆使した画像、映像表現とも触れ合っていくと、アナログとデジタルが共振する時代を語る精神がかたちつくられてきます。今こそ、自分の眼と、脳と、手との連携による生きる人間の身体運動としての自分を、鍛えることが重要なのです。石膏デッサンは、グローバルな地球社会につながる、永遠の題材（モチーフ）なのです。

東北という地で、このような修練を積み重ねると、多種多様な芸術家、ものづくりのすばらしい人びとが生まれることを期待して、今日の総評にしたいと思います。